B. 生徒指導に関する研究

多層化する中・高校生の生徒指導上の諸問題

鈴木洋一郎　中野　満男　米山　誠　服部　晴子
徳井　輝雄　白井　宏　米田　閏一　斉藤　真子
山田　雄一　今治富美子

<要旨>まずわれわれグループの問題意識の概略について述べる。われわれはまだ「多層化」の実態について統一的把握をしていないが，おおよそどのような事を頭に浮べているかを述べる。さらにその背景や原因について述べ，「多層化」にともなって起ってくる諸問題の解決策を考える際どうしても考慮せざるを得ない諸側面を指摘する。次に「多層化」の実態を，具体的場面や行事において，直接・間接に述べ，さらにその背景や原因，それへの対応策にも触れていく。

I　はじめに

高校進学率の上昇にともなう「能力」の「多層化」や「多様化」が教育現場や教育行政にさまざまな問題をなげかけている。教育の効率のみを考えるならば，単層化や一様化した集団を人為的に作り出し，教育を行おうということになるだろう。普通科内でのコース振り分けや学校間格差をつけるやり方は，この考え方に近いといえる。高校に入りたい者が多層化し多様化してくるのに対し選抜方法を操作することによってなるべく一様化するという考え方を否定するならば，一方では生徒構成が多層化した集団にどう対処するかを，考えなくてはならない。学校間格差をなくし，小学制にし，全入制をとり入れるには，そのような問題を解決しなくてはならない。これは教育現場にとって困難で重大な問題である。われわれグループは，本校が現在そのような問題に直面しつつあるという認識の上に立って，このような研究課題をとりあげることにした。

まず本校における生徒指導上の問題を本校教師の発言からみてみる。

宿題をやってこない（中学）授業が静かに受けられない（中学）幼稚で甘えている。思考パターンが感覚的である。気力に乏しい。部活動が不活発になり上達しようとする意欲に乏しい。ものぐさが多い。飲酒，喫煙，盗難事件が中，高共に出てきた。覇気がない。ゴーゴーダンスに熱中（高）。H・Rでの生徒同志の関係に問題がある，たとえば，或る特定の生徒をいじめる。悪質なイタズラに対し見て見ぬ振りをする。助け合いがない。あっても家出を助けたり，わるいことをかばったりする方向に向けられる。利己的，孤立的な者が多い。

われわれは生活指導上で問題となる多層化や多様化の実態をまだよく把握していない。以下具体的な問題毎にそれを追求してみたい。これがわれわれの課題の一番目のものである。

二番目には，その実態や原因や背景に少しでも切り込みたい。

われわれの討論では，入試制度や，社会的風潮，テレビっ子の登場，父母の意識や家庭環境の変化などをその背景や原因とした。たとえば社会的風潮をさらに分析するならば，現代社会は儲け主義である。したがって，儲けるためにはなんでもやるという人心の荒廃を抱いている。さらに人々は何も信用しなくなっており当然の帰結として，自己本位となったり権威を認めないという風潮を生み，しらけやだらしなさを生み出しているのではないか。

権威の崩壊は価値観の多様化を生み，多様化した価値観をもつ個人個人のあつまりである学級が集団的にまとまりにくくなっており，これがしらけや自己本位を助長しているといえる。自分さえ立派であれば，他人はどうでもよい，自分は自分の殻に閉じこもっておればよい。どうせ集団では何もまとまってやれないのだから，どうせ他人は自己に直接関係のないことには関心がないのだから　……という考えを一部の生徒はもつに至っている。

父母の意識や家庭環境も変化している。兄弟が少なく一人っ子が多くなっている。家庭では酒類を飲ませているのに学校はきびしく飲酒事件を追求する。

多様化した考え方をもつ生徒が集ってくる学校が，どちらかといえば一様化する装置として働いている現状では，こうした摩擦が起るのは当然であろう。

生活指導上の問題が，学力や能力や価値観が多様化している生徒集団に対して，進学勉強という一様なやり方で対処する時に起ってくるとするならば，次のよ

うな点にまで論究しなければいけない。これが第三番目の課題である。

① 能力（学力）の多様化にどう対処するか。能力観や評価法の変革が必要である。

② 大学入試，高校入試のみで生徒を引っぱっていく現在のやり方に適応できない生徒が多くでる可能性がある。職業高校ではこの問題が大きくなっている。これは非常に困難な問題である。

③ 教科指導一本やりではいけなくなる。旧制中学旧制高校の感覚では全くだめである。教科指導の中での生活指導，生活指導の中での教科指導を考えざるを得ない。このような認識に立つならば，学校行事，生徒会活動，部活動の存在意義が大きくクローズアップされてくる。教科指導に重点が置かれている現在のカリキュラムの再検討が唱えられるのもこの理由からである。

④ 集団活動の育成が必要になる。集団活動にしらけを感ずる集団をどう導くかが大きな問題である。

⑤ 生徒指導方法の問題。自主性の強い生徒と自主的活動の出来にくい生徒に対するきめ細い指導が必要になる。後者に対しては，ますます，自主性の育成を狙った指導が重要となる。

Ⅱ 部活動・必修クラブと多層化

山田雄一・米田閏一

冒頭に私が部活動から連想する言葉をあげてみると「規律」「猛練習」「自主性」「仲間」「合宿」等が浮かぶ。果たして，この一年直接に部活動指導をして思うことはそれらにかなりの隔たりが感じられるのである。もちろん各部に規律も練習も仲間意識もあるだろう。しかし，私の高校時代のものとどこか違うような気がしてならない。

48年度必修クラブ（全クラと略称以下全クラと書く）成立以来，参加率は減少しているものの，中高で70%以上のものが部に登録しているのだから，数字的には部活動衰退は顕著ではない。が，50年度末から部活動衰退がとやかく話題になり，部活動のあり方，生徒の姿勢が問題にされている。その姿勢で最も問題になったのは，練習を勝手きままにさぼる態度である。生徒にしてみれば，部活動は自由な課外活動であり，さぼるという感覚はないのかもしれない。生徒自らが，練習日を，目標に向けての練習内容を決めているのだから我々がそれをさぼったと口を出すのもおかしなものである。部活動は，それを愛する者たちが，自主的に集まって仲間となり，自主的に目標に向かって取り組んでゆくべきものであるから。とにかく生徒が部活動をいかに捕えているかということを，実際に例をあげて考えていくことにする。

高校野球部は50年度1年生は2人しか入らなかった。そのうちの1人は技術的にはかなり良いものを持っているのだが，練習をさぼりがちで，夏の試合以来ぱったり練習にこなくなってしまった。やめるのならちゃんと退部届を出せと指導しても，けっしてそうしようとしない。そして本年度，部登録の際に呼び出して真意の程を聞いてみると「今はやらぬが，3年生が抜けたらやる」というのである。昨年，練習をきままにさぼり3年生とおりあいがうまくいかなくなったせいもあろうが，そこにはもう学年を超越した仲間意識は見られない。又，高校女子バレー部でも，春の練習に全然参加せずに，顧問の先生から「やめろ」と断言されても，又本年部登録をして，たまに顔を出す生徒が数人いるそうである。彼らは部をやめてしまいたくはないのだ。しかし価値観として他のものを捨ててまで部に没頭しようとはしない。そういう生徒が今の部活動の主流をなしているのではないだろうか。もちろん野球部にしても，バレー部にしても，本当に部を愛し自ら進んで朝練習をする生徒も中にはいるのだが。そういう生徒を除いて主流の生徒は，やや過言ではあるが，部を一つの遊びの場として価値を見出しているようである。だからそれよりおもしろい遊びがあればそっちへいく。又，何か不都合なことがあるとその遊びを一時中止するのである。自分の好きな遊びだからけっして放棄はしたくないのだ。先日，卓球部とソフト部が交歓試合をしていたが，2年生でこんなに両部のものがいたのかとひどく驚かされた。

今度は文化系部に目を移してみよう。加入者の割合が運動部と比べて10分の1しかないことからわかるように，例外を除いてほとんど活動が見られない。部の性格からして運動部よりも自主的活動が要求されるから，生徒はやっていけなくなってしまうのである。昨年で廃部となり，本年度は部のリストから消えた部の昨年の成立状況を例にあげよう。各部キャプテンに一年間の計画用紙を配布しようと呼び出したところ，その部だけどうしてもこない。名表で調べた登録には確かに数人いるので，顧問の先生に問い合わしたところ今年は顧問をひきうけた覚えはないとのこと。つまり生徒は部登録だけして，顧問の先生にも連絡していなかったのである。そこでその全員を呼び出して問いつめると，キャプテンもいないし，活動計画もない。もうやめるのかと聞けば，あやふやにやりたい意志を示していた。その場で責任者を決め，顧問の先生にお願いをさせて部として一応成立はしたが，案の定，ほとんど活動しないままに廃部となってしまった。が，彼らは又他の部に登録して，新しい遊びを始めている。

その姿勢は，全クラでもうかがえる。春の気候のよい時，高3の者たちは時間を延長させてソフトボール